

日刊 勤労千葉

1985・1・1

No. 1830

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二五三五六（公衆）〇四七二（22）七二〇七

闘春

国鉄千葉動力車労働組合

執行委員長

中野 洋



臨調・行革粉碎！ 三里塚ジェット闘争勝利！

今年、第二次世界大戦の終結から満四〇周年にあたる。この四〇年間、世界は、帝国主義のあくなき侵略と収奪のなかで、常に「戦争」と「失業」「飢餓」の不安にさらされ続けてきた。

そして、いま、戦後世界体制の未曾有の危機は、アメリカを先頭とする帝国主義の動揺と没落を促がしつつ、史上3度目の世界戦争の爆発に向って確実に突き進んでいる。

こうした、帝国主義の暴圧に抗する人民の闘いは、中近東、中南米からアジアに燃えひろがり、英国・炭鉱労働者の闘いは二〇世紀最大の産別ストライキに発展しつつある。

まさに、世界を席卷する階級対立の激化は、本質的に核戦争か革命かをめぐって激しく争われており、日本もその域外にない。かろうじて再選をはたした、日帝・中曽根は、米帝・レーガンと新年早々軍事費のGNP一〇％枠突破を土産に会談を行い、日米安保をテコに軍事大国化へ改憲に向けて、「財政」「行革」「教育」のいわゆる「三大改革」を中心とする超反動政策をより強引に押し進めようとしている。

こうした、「戦後政治の総決算」をかけた大反動の強まりの焦点に「国鉄」と「三里塚」がある。

国鉄当局は、昨年、「余剰人員対策」と称する首切り「三本柱」を勤労革マルを先兵に強行突破し、これを拒否する勤労千葉、国労に対し、雇用安定協約の破棄通告を行い、「六〇・三時改」では本線乗務員の実に三〇％に及ぶ要員合理化を提案してきた。

また、国鉄再建監理委員会は、第2次緊急提言で「分割・民営化」と一〇万人の要員削減という途方もない攻撃を打ち出してきた。

いま、革マル指導下の勤労職場では、組合運動が「三本柱」推進運動と化し、組合の名による「肩叩き」が横行するかわら、勤労千葉、国労に対する邪悪な組織破壊策動を強めている。

こうした一連の流れは、昨年末の新幹線整備計画をめぐる自民党の対応をみるまでもなく、敵の真の狙いが唯一戦闘的国鉄労働運動の解体にあることを示している。

そして、本年は、国鉄当局の「再建」案、監理委員会の本答申をめぐり、いよいよ正念場をむかえ、三里塚もまた決戦に突入する。

いま、われわれは、「国鉄」と「三里塚」をめぐる決戦の八五年の入口に立っている。

一〇万人首切り、分割・民営化、ローカル線切り捨て攻撃の中で、「去るも地獄、残るも地獄」の国鉄労働者と、三里塚・芝山の地に生活すること自体が「犯罪視」されている農民が固く手をつなぎ、まなじりを決して、共通の敵、日帝・中曽根に挑めば、勝利は全く可能である。

情勢は、間違いなく、われわれに「第二の八一・三」を要求している。

勤労千葉は、闘わずして屈服し、奴隷と走狗になることをキッパリと拒否する。

いまこそ、全組合員の英知をふりしぼり、あらゆる可能性を追求し、闘いの準備を開始しよう。

当面の任務を、
第一に、六〇・三大要員合理化攻撃をあらゆる手段を駆使し、阻止すること。

第二に、三本柱一〇万人首切り計画に対決し、「一人の首切りも許さない」闘争体制を構築すること。

第三に、三里塚二期決戦勝利に向けて、三・二四現地集會に、三度目の5割動員を実現すること。

第四に、勤労革マルを解体・一掃し、闘う国鉄労働者との共闘を徹底的に追求すること。

第五に、組織と仲間を信頼する作風をより定着させ、家族ぐるみの団結を確立すること。
に置き、全力をあげてまい進しよう。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ！

一九八五年一月一日